公益社団法人　日本コントラクトブリッジ連盟　公式ホームページ

JAPAN CONTRACT BRIDGE LEAGUE

http://www.jcbl.or.jp/home/introduction/tabid/155/Default.aspx

コントラクトブリッジは、世界で最も知的かつエキサイティングなゲーム

世界中に約1億人の愛好家が居ます

運の要素は極力排除され、囲碁や将棋のように技量がものをいいます。

※「コントラクトブリッジ」が正式名称ですが、単に「ブリッジ」とも呼ばれ、親しまれています。

2対2のダブルス戦です

４人のプレイヤーがN－S（北・南）、E－W（東・西）の2チームに分かれ、ペアで戦います。

時計まわりに1人1枚ずつカードを出し、最も強いカードを出した人がその4枚を獲得します。

この4枚1組をトリックといいます。ゲームの目的は、役を作ったり絵札を集めたりすることではなく、「トリックをたくさん取ること」。

使われるカードは 52 枚ですから、1人が 13 回カードを出します。

この 13 トリックのうち、自分のペアが相手のペアより多くのトリックを取れば勝ち

「オークション」と「プレイ」の2つで成り立っています

プレイを始める前に、「オークション」によって「切り札」「ディクレアラー（親）」「獲得するトリック数」を決めなくてはなりません。この「オークション」こそコントラクトブリッジの醍醐味といえるでしょう。

各プレイヤーは、自分に配られたカードを見て「どのスーツ（マーク）を切り札（あるいは切り札なし）にして、いくつのトリックを取るか」を順に宣言（ビッド）して競り上げていきます。

そして最後の一番高いビッドが「コントラクト（契約）」となり、コントラクトどおりのトリック数を取れば勝ち、取れなければ相手側の勝ちとなります。

知的で社交的なゲームです

コントラクトブリッジでは、単純なトリックテイキングゲームを「運の要素を極力排除し、技術を競う公平で知的なゲーム」とするために、「オークション」をはじめ詳細なルールが決められていますが、初めからすべてを覚える必要はありません。まず参加して楽しんでみてください。オークションの過程や場に出されたカードから相手の手の内を読み、最善の戦略を組み立てていく…。推理力や記憶力、集中力を駆使した戦いが、静かに、しかしスリリングに繰り広げられます。やればやるほど知的好奇心が刺激され、面白さが増す――そんな奥深さがブリッジの魅力です。

もうひとつの大きな魅力は、2対2で対戦するという点にあります。ルールを守りながらパートナーとうまく情報交換し、協力し合わなければ良い結果は得られません。そこにおのずと思いやりの気持ちが生まれ、また楽しみをともにすることによって、初めて出会う人ともすぐに仲良くなれる…、欧米では「社交上必須のたしなみ」とさえ言われるゆえんです。

ブリッジの由来は古く、その起源は約 500 年前の英国にさかのぼります。以来少しずつ改良を重ね、1925 年に現在のルールが完成しました。

ブリッジはいつごろ日本へ？　～日本のブリッジ黎明期～

ブリッジはいつごろ、どうやって日本に入ってきたのでしょうか。正確な記録はないのですが、20 世紀初頭頃といわれています。国際社会にいち早く出て活躍した外交官や通産省、銀行、商社、海軍など外国とかかわりの深い人々が外地で社交上欠かせない教養であったブリッジを覚え、帰国後周りの人々に教えたことで広まっていったと伝えられています。なかでも英国海軍から学んでいた帝国海軍の軍人の間でブリッジが大変盛んだったとか。ブリッジは英国海軍から日本に入ってきたという説もあります。少なくとも日本におけるブリッジの歴史はおよそ 100 年に近いといえるのではないでしょうか。

山本五十六元帥とブリッジ

ブリッジを愛好してきた日本の著名人のなかで、最も早い時代の人物に太平洋戦争時の連合艦隊司令長官で海軍大将の山本五十六元帥（1884～1943）の名が挙げられます。山本元帥のブリッジ好きは当時から有名で、1930 年代ロンドンで行われた軍縮会議に出席した折には随行武官とは勿論のこと、英国使節団代表ともしばしばブリッジを楽しんだという話もあります。

山本元帥とブリッジについて今でもブリッジ界で語り継がれている有名な逸話をご紹介しましょう。真珠湾攻撃成功を祝って東京のブリッジクラブが、

『雨風の師走の空も雲晴れて

グランドスラムの心地よきかな』

という歌を贈った時、元帥から次のような返歌があったそうです。

『グラスラは、ほど遠けれどリダブリて

ジャストメイキの心地こそすれ』

意味：真珠湾攻撃の成功をグランドスラム（注：ブリッジで 13トリック全部とることを宣言してプレイし、宣言どおりに完勝すること）に例えて称賛されたのに対して、元帥は『いや、「無理だ」と言われていたゲームを「それでもできる」と強気に言ってかろうじて宣言どおりに勝てた、それだけのことに過ぎない』

留学時代も含めてたびたび訪れていた欧米の実力を充分に知っていた山本元帥は開戦に最後まで反対していました。その後の戦況を見通していたような彼の心情が、ブリッジを知る人々に今もなおストレートに沁み入る返歌ですね……。

コントラクトブリッジというトランプ遊びをご存じですか。サマセットモームがこよなく愛し、その前身となったホイストという遊びは、サンドイッチ伯爵が食事の時間も惜しいほど夢中になって“サンドイッチ”という軽食をうみました。麻雀に似たセブンブリッジとは全く異なり、むしろページワンや、ツーテンジャック、ナポレオンに似たゲームです。

４名で、向かいあった者同士が味方となり、52 枚のカードを一人 13 枚持って一枚ずつ出し、強いカードの人が 4 枚一組を獲得します。予め、何を切り札にすれば何組取れるかを約束（コントラクト）し、約束（以上）が履行できれば約束したペアに得点が、約束ほどには取れなければ相手ペアに得点が入ります。麻雀より運の入る要素が少なく、確率論の知識や数学的思考も要求される知的なゲームです。

最近スポーツでグランドスラムという言葉をよく耳にします。主要大会全部を優勝することや満塁ホームランなどに使われますが、これは元々ブリッジで、予め全部取ると約束して全部の札を取りきることです。

コントラクトブリッジは、チェスと並び、世界的に大変メジャーなゲームです。外国の新聞には、日本の将棋・囲碁欄と同じように、ブリッジとチェスのコーナーが必ず掲載されています。

日本では、社団法人日本コントラクトブリッジ連盟を中心に競技人口は 10 万人程度ですが、高松宮杯、外務大臣杯などの大きな大会も開かれています。本学コントラクトブリッジクラブ出身者も、外務大臣杯での優勝するなど、大いに活躍しています。

（東北大学コントラクトブリッジクラブの HP より）